

Corneilleの《Othon》について

村 瀬 延 哉

(1)

《Othon》は1664年8月始め、フォンテーヌブローで御前公演を行った後、同年11月5日ブルゴーニュ座で初演された。作者58才の時である。作者は、

*Si mes amis ne me trompent, cette pièce égale ou passe la meilleure des miennes.*¹⁾

(友人達が私をかついでいるのでなければ、この作品は私の最良のものに匹敵するかそれを凌いでいる。)

と自讃している。しかし、この作品が後世は勿論、同時代人からもそれほど高い評価を受けていたか疑わしい。Boileauの《Art poétique》の一節は、《Othon》を念頭に置いて書かれたと言われる。

*Vos froids raisonnements ne feront qu'attiédir / Un spectateur toujours paresseux d'applaudir, / Et qui, des vains efforts de votre rhétorique / Justement fatigué, s'endort, ou vous critique.*²⁾

(あなたの冷やかな議論に、観客は白けるだけだ。決して拍手喝采しない観客は、あなたのレトリックの空疎な試みに当然の如く疲れ果てて、居寝りをするかあなたを非難する。)

確かに《Othon》は、ある意味で作者の才能の衰えを感じさせる。《Le Cid》や《Polyeucte》の力強い人間感情の表現を、ここに探し求めても無駄である。狡猾な打算を胸に秘めて、延々と議論を続ける宮廷人達のドラマは、読者の共感と呼んで、深く感動させるという風にはできていない。ただ、芸術的価値といった問題を別にすれば、一種独特の魅力を持った作品であることも否定できない。以下我々は、所謂四大悲劇などと趣の異ったこの作品の興味がどのあたりに存するか、過去の作品とも対照しながら、明らかにしていきたい。

まずその前に、《Othon》の粗筋と、作品の理解に役立つと思える文学史的事実と言及しておく。

(2)

舞台は帝政ローマ。皇帝 Galba の治世である。元老院議員の Othon は、前皇帝 Néron の時代に、寵臣として君主に追従し放蕩生活を送った。揚句の果て、愛妻 Poppée を Néron に奪われ、La lusitanie(現在のポルトガル)総督に任ぜられて、体よく宮廷から追放されてしまう。その後、Galba が Néron に反旗を翻し皇帝になると、真っ先に現皇帝に忠誠を誓った。

幕が開くと Othon は、執政官 Vinus の娘 Plautine との結婚を望んでいる。皇帝は老先短く、宮廷で実権を握っているのは三人の奸臣達。親衛隊長の Lacus、解放奴隷の Martian、それに Vinus である。彼らの一人と結んで身の安全を図る必要を、Othon は痛感している。

友人の Albin は、皇帝の姪 Camille との結婚を勧める。子供のない Galba が姪の夫に帝位を譲る積りだからだ。だが、Plautine の人柄を愛するようになった Othon は、これに同意しない。

Vinus が突然 Othon に Camille と結婚するよう迫る。Plautine との結婚は、Lacus、Martian の反対に会い、実現しそうにない。彼らは Vinus と Othon が同盟するのを恐れている。両陣営の敵対は、一方が死に絶えるまで続くだろう。折しも Galba の後継者が選ばれようとしている。Lacus は Pison を推した。Vinus は Othon を帝位につける積りである。

しかし、Othon は Plautine をあきらめられない。それなら皇帝になった後、Camille を離縁する手もあると Vinus が誘惑する。Plautine が現れて、父親の卑劣な計画を非難する。だが彼女もまた、Camille に言い寄るよう勧めるので、Othon はしぶしぶ同意する(一幕)。

Martian が Plautine に愛を打明け、Othon を皇帝に推す代りに妻になってくれと求める。一方 Othon を帝位から退けようとする Lacus は、Othon と Plautine の婚姻を Galba に認めさせる。さらに Martian の意向を知り、Othon の如き有能な人物を皇帝にいただくことが、自分達にとっていかに危険かを説き聞かせる。結局 Martian も、Pison が Plautine を自分に与えるならという条件つきで、Pison 擁立に同調する(二幕)。

Galba が Camille の夫に Pison を選ぶ。Othon を愛する Camille は言を左右して、伯父の命に従うまいとする。業をにやした Galba は、Camille

とOthonの結婚を許す代りに、帝国をPisonに譲る。Othonは帝位につけないと知って、Camilleに自分との結婚を思い直すよう説得する。愛されていないと悟った彼女は、憤然としてしかし冷静さを失うことなくOthonの許を去って行く（三幕）。

OthonとPlautineが嘆き悲しんでいると、Viniusが状況の急変を知らせる。Pisonが後継者に選ばれたことに不満な一部の兵士達が、Othonを皇帝に擁立しようとしているのだ。Othonは反乱軍と合流するために出て行く。その後でPlautineは父親から、Pisonの妃に選ばれたので、Othonの反乱の成否に関係なく、いずれ皇后になれると教えられる。

一方Martianは、PisonをPlautineではなく、Camilleと結婚させることに成功する。Camilleは感謝のしるしに、Plautineを与える約束をする。また、やがてOthonを暗殺する積りだと心中を明かすが実際はOthonの命を守るための策略であることが後で分る（四幕）。

反乱をいかに鎮圧するかをめぐって、御前会議が開かれている。Viniusは時間をかけて敵の自滅を待つ戦法を、Lacusはただちに討って出ることを主張する。そこにOthon暗殺の噂が伝えられ、反乱軍のAtticusが、Martianに買収されて犯行に及んだと名乗りでる。皇帝は、兵士の動揺を鎮めるため、LacusとViniusを伴って宮廷を出る。

後に残ったAtticusが、Othonが生きていること、裏切りに応じた振りをして皇帝とLacusを虜にする計略であったことを明かす。続いてMartianが逮捕される。

Othon軍に包囲されたLacusは、GalbaとViniusを道連れに自殺する。皇帝に就任するOthonは、Plautineに妃になるよう乞う。しかし彼女は、父の死を悼むことだけが自分の義務であるとして、同意しない（五幕）。

Corneilleは、主としてTaciteの《Histoires》を下敷にして、この作品を構想した。従ってOthonを始めとして大部分は、歴史上実在の人物である。Flavie, Albiane, Rutileなどの端役を別にすれば、Camilleだけが純粋に架空の人物である。

なお史家の伝えるところでは、Othonは、Viniusが彼をGalbaの後継者の地位につけることができたなら、Viniusの娘と結婚する密約を交していた。しかし彼の尽力に頼らずに皇帝になれたので、約束を履行しなかった。³⁾ 劇の結末が、二人の結婚で終らなかったのは、作者がこの史実に反することを恐れたからである。

(3)

1661年 Louis XIV の親政が始まる。国王が行った最初の重要な政治的行為は、Fouquet 財務卿の逮捕であった。Fouquet はかねてから Colbert によって国費乱用の廉で告発されていた。失脚の直接の契機は、Vaux-le-Vicomte の館に国王を招いて宴を催したことである。余りに豪華な宮殿と宴に嫉妬を感じた国王は、数日後 Fouquet を投獄してしまう。裁判は62年3月に始まり、64年末まで続いた。結局 Fouquet は終身禁固刑に服することになる。

失脚以前の Fouquet は豊かな財力を背景に、文芸の理解ある庇護者であった。La Fontaine などのパトロンとして名高い。彼は Corneille とも係りを持っていた。《Pertharite》の失敗以後沈黙を守っていた Corneille は、59年1月《Œdipe》を上演して劇界に復帰する。このテーマは、Fouquet が示唆した三つの題材の中から、Corneille が選んだ。劇作の要請があったのは、《Œdipe》を二ヶ月で完成したと作者が述べている点からみて、⁴⁾58年夏か秋の始めとみられる。⁵⁾作品の冒頭には財務卿への献詞が載せられていた。

ところで Fouquet 裁判の過程で、この献詞に対し、二千リーヴルの報酬が支払われていたことが公になる。押収された Fouquet の機密文書の中に、Corneille の名前が見つかったのである。検察側の解釈では、Fouquet は、Albert Marchand なる人物に関税請負の権利を与える代りに、Corneille 他数名に秘密裡に年金を支払うよう命じていた。もっとも、この件は Fouquet 側の反論もあり、また Corneille を有罪にすることは元元宮廷の意図ではなかったとみえて、詩人はその《才能と名声》に免じて、罪を問われずに済む。⁶⁾しかし、Corneille と、Fouquet をとり巻いていた文学者の多くにとって、この事件が一種の脅しと映ったことは想像に難くない。それはまた、もし国王に恭順の意を示しさえすれば、過去は問わないという免罪の約束でもあった。

1663年1月外国人を含め62名の文学者、歴史家、学者に Louis XIV の年金が支給されることになる。⁷⁾受給者リストの作成には、主として Chapelain があつた。Corneille は二千リーヴルを与えられ、史家 Mézeray 四千リーヴル、Chapelain 三千リーヴルなどには及ばぬものの、政治的影響力を持たぬ文学者としては最高クラスに属していた。年金と言っても、Colbert が国王に対する忠誠度を考慮して、毎年更新するシステムになっていた。

要するに、進行中のFouquet裁判と相俟って、年金制度は絶対王政による文化統制に重要な役割を果たした。実際この時期、文学者達は一斉に国王の賛美を始める。⁸⁾ Corneilleも例外でない。63年に年金支給を感謝して《Remerciement au Roi》を発表した後、《Othon》、《Attila》など彼の作品には、Louis XIV とフランス王室の露骨な賛美が目につくようになる。⁹⁾

Tallemant des Réaux は、CorneilleがOthonの戴冠というテーマを選んだのは、引き継いで年金を受けたからにすぎないと皮肉っている。¹⁰⁾

《Othon》には、Louis XIV を意識して書かれたと思われるところが何箇所もある。まず側近政治を非難し、親政を称えるくだりである。Lacus, Martian といった私利私欲を貪る側近が歓迎するのは、どんな君主か？

Voyez d'ailleurs Galba, quel pouvoir il nous laisse, / En quel poste sous lui nous a mis sa faiblesse, / Nos ordres règlent tout, nous donnons, retranchons, / Rien n'est exécuté dès que nous l'empêchons; / Comme par un de nous il faut que tout s'obtienne, / Nous voyons notre cour plus grosse que la sienne,¹¹⁾

(ところでガルバはどうか。彼が我々にどれほどの権力を与え、彼の脆弱さが、彼の下で我々をいかなる地位にすえたかを考えてみる。我々の命令がすべてを決めるのだ。我々が与えたり取り上げたりするのだ。我々が反対するや何事も成就しない。万事が我々どちらかの手を通してしか得られないので、我々の宮廷はガルバの宮廷より栄えている。)

反対に彼らが恐れるのは、自分で決断を下すだけの政治手腕と権力を持った君主である。

Sous un tel souverain nous sommes peu de chose, . . . Sa main seule départ ses libéralités, / Son choix seul distribue États et dignités; / Du timon qu'il embrasse il se fait le seul guide, / Consulte et résout seul, écoute et seul décide, / Et quoi que nos emplois puissent faire du bruit / Sitôt qu'il nous veut perdre, un coup d'œil nous détruit.¹²⁾

(このような君主の下では、我々はとるに足らない。……彼の手だけが施しをし、彼の選択だけが国や要職を分かち与える。彼の握る舵の、彼だけが唯一の操縦者である。助言を求めても決定するのは彼であり、意見を聴しても一人で決断する。我々の役職が声望を得ているとはいえ、彼が望めば、一瞥で我々を滅す。)

最後の二行などは、Fouquetの失脚を連想させる。

若い Louis XIV は歓楽を好み、ヴェルサイユ宮で《魔法島歓楽》などの祭典を催した。またMarie-Thérèseと結婚後も、次々と愛人を作っている。

Tallemant des Réauxは、Corneilleが《Othon》中に、《王の恋愛沙汰を弁明する詩句を挿入》したと述べているが、¹³⁾具体的にどの台詞を指すのか、明らかでない。Marty-Laveauxは、PlautineがOthonにプラトニック・ラブを説くくだりがこれに該当し、王とMlle de La Vallièreの関係を示唆していると考えた。¹⁴⁾

ともあれ《Othon》には、快樂好きの君主に寛容な姿勢が窺われる。Galbaが、Othonの放蕩の前歴を非難すると、Camilleは、

Souvent un peu d'amour dans les cœurs des monarques / Accom-
*pagne assez bien leurs plus illustres marques.*¹⁵⁾

(しばしば君主の少々の恋愛沙汰は、彼らの最高者としての特性にふさわしい。)

と答える。社交的で、女性を含めて人の心を魅する術にたけることが、宮廷ではきわめて有用である。OthonのライバルPisonに欠けているのは、まさにこの点である。

Sa probité sévère est digne qu'on l'estime; / Elle a tout ce qui fait un
grand homme de bien, / Mais en un souverain c'est peu de chose, ou
*rien.*¹⁶⁾

(彼の謹厳実直は尊敬に値する。高潔の士であるには、それで十分である。しかし君主としては、取るに足らぬか無意味である。)

Corneilleは作品の冒頭でも、Néronの宮廷でのOthonの素行を、主君を戴く宮廷人としてやむを得ざるものと弁護している。

J'ai tâché de faire paraître les vertus de mon héros en tout leur éclat,
sans en dissimuler les vices, . . . et je me suis contenté de les attribuer
*à une politique de cour,*¹⁷⁾

(私は主人公の美德を余すところなく示すとともに、その悪徳も隠さないように努めた。……私は彼の悪徳を宮廷の政略のせいにするだけで満足した。)

(4)

《Othon》は宮廷の密室で繰り広げられる陰謀のドラマであり、陰謀は

政略結婚を軸に展開する。まずOthonとPlautineの結婚が頓座し、OthonはCamilleとの結婚を目論むが、成功しない。次にPlautineがPisonの妻に乞われる。しかしPisonはCamilleと、PlautineはMartianと結婚することになる。これも成就しない。最後にOthonとPlautineが結ばれるかに見えるが、Plautineが拒絶して劇が終る。

一見したところ《Othon》は、Corneilleの初期喜劇や所謂愛と名誉の葛藤で定義される傑作悲劇と、類似点を持っている。この劇で、何組ものカップルの結婚が計画されては崩れるのは、初期喜劇で愛し合う男女達が、愛憎の機微に操られ近づいたり離れたりしながら、結末に向って読者の興味をつないでいくのによく似ている。また、帝位を目指すOthonが、Plautineへの愛の板挟みになるのも、傑作悲劇の葛藤の構図を思わせる。

しかし、もう少し仔細に観察するなら、Corneille劇の変貌が明らかになってくる。それは特に恋愛の描写に顕著に表れる。初期作品や《Le Cid》に描かれたみずみずしい恋愛感情、或いは《Polyeucte》の力強い夫婦愛をもはや見い出せないからである。《Othon》で目につくのは、宮廷式の大袈裟で *galanterie* に満ちた、しかもメロドラマがかった恋愛の形骸だけではないだろうか？従って、この作品を愛とたとえば野心の葛藤悲劇と定義するのは、必ずしも正確ではあるまい。対立の一方の項が、読者の胸を打つ切実性を持たぬ以上、葛藤の図式は崩れてしまうからである。

だが結論を急ぐ前に、具体的にOthonの言動を検討し、恋愛と野心とがどのような形で劇の展開に関与しているか明確にしたい。

※ ※ ※

暗殺が続発するローマで身の安全を図るために、OthonはViniusの娘に近づいた。

. . .demeuré seul de toute cette cour, / A moins d'un Protecteur
j'aurais bientôt mon tour. / Je choisis Vinius dans cette défiance, /
Pour plus de sûreté j'en cherchai l'alliance.¹⁸⁾

(この宮廷で孤立して庇護者もないなら、遠からず私の番が廻ってくるだろう。この不安から、私はヴィニウスを選んだ。安全をさらに確実にするため、私は彼との縁組を望んだ。)

もっとも彼の言を信じるなら、現在はPlautineを本気で愛している。

Mais cette politique est devenue amour.¹⁹⁾

(しかしこの政略が恋愛を生んだ。)

Albinが、Camilleを口説いて次期皇帝の座を狙ってはどうかと勧める
と、Othonは不可能な理由を列挙する。

*La beauté de l'objet, la honte de changer, / Le succès incertain,
l'infaillible danger, / Tout fait à tes projets d'invincibles obstacles.*²⁰⁾

(愛する女性の美しさ、心变りの不名誉、不首尾に終る可能性、避け
難い危険、すべてが君の言う計画の越え難い障害となる。)

Plautineへの愛情が、反対の重要な理由になっている。しかし抜け目ない
宮廷人として、Othonは周囲の政治状況に目配りすることを忘れていない。
もし心変わりしてCamilleの愛を得られなかった時、彼の立場はどうなるか？
Galbaの三人の寵臣達は、Othonが皇帝の座を窺っていると知ったら許し
はすまい。特に娘をCamilleに見変られたViniusの復讐は恐れても余りあ
る。

Othonの論理はいかにももっともであるが、逆に、これらの懸念が解消
されるなら、帝位に誘惑されて恋人を捨てるのではないかと危惧させると
ころがある。Dobrovskyは、Albinの問いにOthonが即座に的確な返答
するところから、この問いが主人公にとって既に馴染深いものであり、権
力の座に誘惑されて自問自答を繰返していた疑いがあると指摘している。²¹⁾

事実、Vinius自身からCamilleと結婚するよう要請された時のOthonの
反論は、必ずしも歯切れがよいと言えない。

Plautineを諦めねばならぬなら、Lacusに殺されるのも同じだと言う
Othonに、Viniusは口先だけの綺麗事だと反撃する。

*Poppée avait pour vous du moins autant d'appas, / Et quand on vous
l'ôta vous n'en mourûtes pas.*²²⁾

(少くともポペーは貴殿にとって同じ位魅力があったはずだが、彼女
を奪われた時、貴殿はだからといって死ななかつたではないか。)

それにViniusの得た心証では、CamilleはOthonを愛している。

*Au vôtre elle a rougi, puis s'est mise à sourire, / Et m'a soudain quitté
sans me vouloir rien dire.*²³⁾

(貴殿の名前が出ると彼女は顔を赤らめ、微笑を浮べた。それから何
も言わずに突然私の傍を離れていった。)

さらにPlautineが登場して、父親と同じ請願をする。Othonは死んだ方が
ましだと言いながらも、次第に抵抗が弱まり、暗黙のうちに彼女の要求に
同意する。²⁴⁾

言葉のやりとりだけを捉えるなら、Othonは愛のために権力の座を犠牲にする覚悟だったが、PlautineとViniusに説得され、やむなく反対の選択をしたように見える。だが、彼の内心で表向きの言葉とは別の思惑が働いていなかったか？先に述べたCamilleへの接近を不可能にする理由が解消するにつれ、野心の炎が燃え上らなかつたとは、誰にも断言できない。

Camilleと会見したOthonは、偽りの思いの丈を打明ける。彼の雄弁は理路整然として見事であったが、愛の告白としては整いすぎて本当らしくない。Camilleは、Othonの告白が偽りであるのに薄々気づきながらも、愛している弱みで、欺かれることに喜びを感じている様子だった。²⁵⁾

やがてGalbaが、OthonとCamilleの結婚を認め、策略は成功したかにもえた。しかし、ここで、この悲劇中最もドラマチックな逆転が起る。もっともこの逆転は、悲劇というより喜劇的な印象を与える。Othonを嫌うGalbaが、二人の結婚を許す代りに、次期皇帝の位をPisonに与えたのである。巧みな口先三寸でCamilleを口説きおとしたOthonは、その舌の根も乾かぬうちに、今度は彼女に向かって、自分と別れるよう熱弁を振わねばならない。彼の述べるもっともらしい理由の背後で、その美辞麗句を操っているのがエゴイズムにすぎないことは、読者の目に一目瞭然である。王位継承権をもたらさないCamilleに用はないからである。

Stegmannは、《Othon》で登場人物が、かつてのCorneille悲劇と同じ高邁な言語を使用しながら、その実その言語が相手を欺くためにしか用いられていない皮肉を指摘している。それはまさしく、あらゆる言動が自己愛(=l'amour-propre)に収束するLa Rochefoucauldの《Maximes》の世界に他ならない。²⁶⁾

OthonがCamilleの説得に用いる論法で、特に注目し値するのは、妻Poppéeの例をひきながら、本来的に権力欲は恋愛感情より強いと主張しているくんだりであろう。

Il est mille douceurs dans un grade si haut / Où peut-être avez-vous moins pensé qu'il ne faut. . . . Et si j'osais encor vous parler de Poppée / Je dirais que sans doute elle m'aimait un peu, / Et qu'un trône alluma bientôt un autre feu. . . . L'amour passe ou languit, et pour fort qu'il puisse être, / De la soif de régner, il n'est pas toujours maître. ²⁷⁾

(〔帝位という〕高い位につけば無数の楽しみが待っている。あなたは多分そのことを十分考慮していなかったのだ。……ポペーのことをも

う一度口にしてよいのなら、あの女も恐らく多少は私を愛していたが、王座がやがて別の欲望に火をつけたと申しあげましょう。……恋は移ろうか弱まるかだ。恋がどれほど激しかろうと、王座への野心をいつまでも抑えることはできない。）

勿論この主張を、そのままOthonの本心と考える必要はない。ただこれは、Othonの反乱が失敗に終わったなら、Pisonと結婚するよう娘に命じるViniusの論法をとまったく同じである。

Que tu vois mal encor ce que c'est que l'Empire! / Si deux jours seulement tu pouvais l'essayer, / Tu ne croirais jamais le pouvoir trop payer, / Et tu verrais périr mille amants avec joie, / S'il fallait tout leur sang pour t'y faire une voie.²⁸⁾

（お前には帝位がどんなものかまだ分らないのか！ほんの数日でもその座に着いたなら、お前も帝位のためならいかなる犠牲も惜しくないと思うであろうに。帝位に道を開くために恋人の血を流すことが必要なら、千人の恋人が死んでいくのも嬉んで眺めるであろうに。）

二人の論法の一致は、OthonもViniusに劣らぬ老練な宮廷人であることを示している。

Camilleは愛されていないと悟り、Othonの前から姿を消す。彼は、Pison, Lacus一味だけでなく、今後はCamilleの復讐まで恐れねばならない。四幕一場のメロドラマがかかった愁嘆場で、Othonは絶えず死を口にし、Plautineは彼を帝位につけるために、軽蔑する解放奴隷Martianとの結婚を考える。Nadalは、Othonなら彼女の犠牲行為を受け入れかねないと推測している。²⁹⁾もっとも、彼がそこまで卑劣な人物かどうか、作品は明らかにしていない。反乱軍がOthonを皇帝に擁立し、彼は一気に帝位にまで駆け登っていくからである。

※ ※ ※

Othonは、本心がどこにあるのか、或いは本心がないのではないかと思わせるほど、曖昧模糊とした性格の持主である。一幕四場、四幕一場などで示したPlautineへの愛情が偽りという訳ではないが、権力意志や保身本能が言動の端々にちらつく。と言っても、打算だけで動いているのではなさそうさ。

Othonの曖昧さは、恋愛の領域だけにとどまらない。Néronの宮廷で名高い暴君と親交を結んだ蕩児は、一度地方に出向くと有徳の行政官に変身

する。

Et sa haute vertu par d'illustres effets / Y dissipa soudain ces vices
contrefaits.³⁰⁾

(彼の高德が見事に発揮されて、その地では装われた悪徳をたちどころに消失させた。)

一体彼にとっては、美德も悪徳も季節によってとり代える衣裳のようなもので、それ自体で格別の価値を持たぬのであろうか？

Othonの今一つの特徴は受動性である。皇帝になる過程で彼が何をしたかを考えれば、受身な態度がよく分る。自分の発意で行ったことと言えば、Plautineを口説いたことだけである。その後 Camille に近づくのは、Vinius 父子の勧めに従ったまでである。反乱軍がOthonを皇帝に担いだのも、彼の意志と関係がない。けちな Galba が、兵士に金品を与えて歓心を買うことを拒んだので、彼らの注意が偶々Othonに向いたのである。³¹⁾しかも王冠は、Atticus が二重の裏切りを働くことによって、勞せずして彼の手に転がりこむ。彼は主人公と呼ぶにふさわしくないほど、劇の展開に関与しない。

... Othon n'agit pas. Plutôt il est agi.³²⁾

(オトン他に働きかけない。むしろ働きかけられる。)

実際に劇を動かしているのは、三人の奸臣達の欲望と打算である。Lacus が、Marian に言う。

Et qu'importe à tous deux de Rome et de l'État? / Qu'importe qu'on
leur voie ou plus ou moins d'éclat? / Faisons nos sûretés, et moquons-
nous du reste. / Point, point de bien public s'il nous devient funeste. /
De notre grandeur seule ayons des cœurs jaloux, / Ne vivons que pour
nous, et ne pensons qu'à nous.³³⁾

(我ら二人にとってローマや国家がどうだというのだ。それが栄光に輝いていようといまいと知ったことではない。我々の身の安全を図ろう。他のことは無視しよう。我々の命に係わるのなら、民の幸せなどどうでもよい。我々の繁栄にだけ心を配ろう。自分のためにだけ生き、自分のことしか考えないようにしよう。)

自分の利益しか考えないこと。自分だけを愛すること。これこそが宮廷で生き延びる最良の処生訓である。Viniusも娘に同じ忠告をする。

Aime Othon, si tu peux t'en faire un sûr appui, / Mais s'il en est
besoin, aime-toi plus que lui,³⁴⁾

(もし、彼がお前の確かな支えになるというのなら、オトンを愛しなさい。しかし必要になったら、彼よりお前自身を愛さねばならない。)

もし *Corneille* が、非情な権力闘争を描くことだけに専念していたら、《*Othon*》は現代人にとってはるかに興味深い作品になったかもしれない。しかし、*Corneille* には恋愛のない劇など想像することができなかった。しかも、*Othon* は *Louis XIV* の宮廷に置いてもおかしくない *galant* な紳士として、恋をするのである。

先程触れた主人公の性格の曖昧さも、恐らくこの点に帰因している。*Tacite* などが語る史実を、かなり忠実に作品に反映し、さらに老いた *Corneille* の冷徹な現実認識が加わって、背景をなす苛酷な政治状況は的確に描き出されている。ただ *Othon* だけが、この状況に妙にそぐわない、受身で甘ったるい、それ故時として偽善者のような存在に映るのである。

結局 *Othon* は、宮廷人の一タイプを体現しているのであって、*Rodrigue*、*Horace*、*Polyeucte* など *Corneille* の過去の英雄と同一視する訳にはいかない。彼らには国家や信仰という大義があった。大義のために、自らの愛を犠牲にしようとする時、彼らは少くとも確実に愛していた。これらの単純な事実は、《*Othon*》のどこを探しても見当らない。国家は私利私欲を満たす場にすぎず、人心が結集する理想などでは決してない。愛は美辞麗句に飾られても、真実味が薄い。恐らく *Othon* にとって真実関心があるのは、この弱肉強食の世界で、いかにして卑怯未練に生き延びるかということだけであろう。権力意志すら、彼にあっては、《*Rodogune*》の *Cléopatre* がそうであるような、《*犯罪的ではあっても、感嘆を誘う崇高さを秘めたもの*》³⁵⁾ではない。帝位につかない限り、反対に *Lacus* 一味に殺されるという恐れが、権力意志の最大の動機になっている。《*Othon*》には英雄は存在しないのである。

※ ※ ※

Adam は、晩年の *Corneille* 劇が、一般の人気を博さなかった理由として、次の三点をあげている。第一に、悲壮で感傷的な作品が歓迎される時代に、理屈っぽい、もっぱら知性に訴えかける作品を書いたこと。第二に、フロンドの乱が終り人心は政治に厭いているのに、相変わらず政争をメイン・プロットとする芝居を作り、しかも彼の描く為政者達が、彼らの属する階級の特異性を越えて、普遍の人間精神を表現するまでに至らなかったこと。

最後に、主人公達が、劇の展開をリードするだけの積極性に欠けていることである。³⁶⁾

以上の特徴は、《Othon》にもあてはまるだろう。しかし、今指摘されたいくつかの短所にも関わらず、この作品が現代の読者に訴えかけるものを持つとすれば、両者が生きている精神風土の類似を考えぬ訳にはいかない。エゴイズムと打算が支配するなかで、姑息な陰謀が巡らされるが、強者はどこにもいない。皇帝さえも、貪欲な兵士達に迎合しない限り生きていけない。そして悪人ではないが、多分完全に誠実でもない無力な主人公の演ずる悲喜劇。作品の伝えるこの不安感と虚しさは、我々の現実のそれにきわめて近いものではないだろうか？

〔註〕

Corneilleの作品からの引用は、A. Stegmann 編 *Œuvres complètes* (Seuil, 1963) による。

- 1) *Au Lecteur d'Othon*, P.664.
- 2) G. Mongrédien: *Recueil des textes et des documents du XVII^e siècle relatifs à Corneille*, C.N.R.S., 1972, P. 199.
- 3) Cf. *Au Lecteur d'Othon*, P. 665.
- 4) Cf. *Au Lecteur d'Œdipe*, P. 567.
- 5) Cf. G. Couton: *La Vieillesse de Corneille*, Maloine, 1949, P.35.
- 6) Cf. *ibid.*, PP.106–108.
- 7) Cf. A. Stegmann, *op. cit.*, P. 884.
- 8) Cf. G. Couton, *op. cit.*, P. 105.
- 9) Cf. A. Adam: *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, del Duca, 1968, t.4, P.212.
- 10) Cf. Tallemant des Réaux: *Historiettes*, Bibliothèque de La Pléiade, 1961, t.2, P. 907.
- 11) *Othon*, II, 4, 621–626.
- 12) *Ibid.*, 613, 615–620.
- 13) Tallemant des Réaux, *op. cit.*, P. 907.
- 14) Cf. *Œuvres de P. Corneille*, éd. des Grands Ecrivains, 1862, t.6, P. 568.
- 15) *Othon*, III, 3, 925–926.
- 16) *Ibid.*, II, 4, 638–640.
- 17) *Au Lecteur d'Othon*, P.664.

- 18) *Othon*, I, 1, 55–58.
- 19) *Ibid.*, 68.
- 20) *Ibid.*, 99–101.
- 21) Cf. S. Doubrovsky: *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, P. 370.
- 22) *Othon*, I, 2, 191–192.
- 23) *Ibid.*, 217–218.
- 24) Cf. *ibid.*, I, 4.
- 25) Cf. *ibid.*, II, 1.
- 26) Cf. A. Stegmann, *op. cit.*, P. 677.
- 27) *Othon*, III, 5, 1115–1116, 1118–1120, 1129–1130.
- 28) *Ibid.*, IV, 3, 1318–1322.
- 29) Cf. O. Nadal: *Le Sentiment de l'amour dans l'oeuvre de Pierre Corneille*, Gallimard, 1948, P.247.
- 30) *Othon*, III, 3, 955–956.
- 31) Cf. *ibid.*, IV, 2, 1259–1264.
- 32) B. Dort: *Corneille dramaturge*, L'arche, 1972, P. 109.
- 33) *Othon*, II, 4, 651–656.
- 34) *Ibid.*, IV, 3, 1323–1324.
- 35) Cf. *Discours du poème dramatique*, P. 826.
- 36) Cf. A. Adam, *op. cit.*, PP. 235–237.

Othon de Corneille

Nobuya MURASE

Othon fut représenté pour la première fois devant la Cour à Fontainebleau par les acteurs de l'Hôtel de Bourgogne en août 1664, puis en novembre sur leur théâtre.

G. Couton montre bien dans *La Vieillesse de Corneille* quels événements politiques ont exercé leur influence sur la pièce et comment le poète y approuve le gouvernement personnel de Louis XIV.

En 1661, le Roi se mit à gouverner personnellement. Il fit arrêter Fouquet, après une fête trop somptueuse à Vaux, où celui-ci l'avait invité. Lors de la saisie des papiers de Fouquet, on trouva un mémoire du surintendant où figurait le nom de Corneille; il aurait adjugé la ferme des douanes intérieures à un certain A. Marchand, à condition qu'il verse en échange une pension à plusieurs personnes, dont Corneille.

En fin de compte, en considération "du mérite et de la réputation" du poète, la Cour lui pardonna. Mais cet événement impressionna la clientèle de Fouquet et notamment Corneille. Ils passèrent en bloc au service de Louis XIV et firent son éloge.

En l'année 1663, le Roi pensionne lui-même une soixantaine de gens de lettres dans toute l'Europe. Corneille recevra 2,000 livres par an: traitement de faveur pour un écrivain peu utile en dehors de son art. Tallemant se moque de lui, en disant qu'il n'a pris ce sujet (= couronnement d'Othon) que pour faire continuer les gratifications du Roi en son endroit."

En effet, il y a dans la pièce plusieurs passages où l'auteur semble prendre parti pour l'absolutisme: d'une part, il déplore les malheurs d'un Etat où les ministres mènent le roi comme un pantin (cf. 621-626); de l'autre, il admire le règne d'un puissant monarque qui "consulte et

résout seul, écoute et seul décide (618).”

Tallemant continue à se moquer du poète: “ce dévot y coule quelques vers pour excuser l’amour du Roi.” On n’a pas pu préciser le passage auquel il fait allusion. Mais il est vrai que, dans *Othon*, l’auteur se révèle indulgent pour le goût que montre le prince pour les plaisirs (cf. 925–926, etc.).

Cependant, un lecteur moderne ne s’intéresserait pas beaucoup au problème de savoir si l’auteur a eu l’intention de faire l’éloge du Roi et de l’absolutisme. D’ailleurs, s’il a eu cette intention, on ne peut dire qu’elle fut couronnée de succès: la conduite du héros est trop ambiguë et trop passive pour lui attirer la sympathie et le faire admirer.

Othon aime-t-il vraiment Plautine? En apparence, il se comporte en parfait amant envers sa bien-aimée. Mais chez lui, l’ambition n’a-t-elle jamais trahi l’amour? C’est sans doute très naturel, parce qu’il vit dans une cour qui obéit à la loi de la jungle.

Il n’est pas pourtant assez ambitieux pour tout sacrifier à son élévation au trône. En vérité, il ne fait rien dans ce but de sa propre initiative: il fait sa cour à Camille, parce que Vinius l’y oblige; s’il se révolte, c’est que les soldats, mécontents de Galba et de Pison, l’y entraînent; il monte sur le trône grâce à la double trahison d’Atticus.

Ainsi Othon est-il loin des héros du genre de Rodrigue, d’Horace, de Polyeucte, qui sacrifient l’amour humain à la gloire ou à Dieu, après un débat aussi cruel que difficile; on peut se demander si l’amour d’Othon est tout à fait sincère. Il n’est même pas un monstre comme Cléopâtre dans *Rodogune*, qui viole sans scrupule la loi morale pour assouvir son désir de régner.

Ce manque de carrure chez le héros peut décevoir un lecteur familier des chefs-d’œuvre de Corneille. D’ailleurs, ce n’est pas seulement le héros qui manque de carrure mais la cour entière de Galba: l’empereur est vieux, faible et mesquin; les trois ministres sont des scélérats ou, pour le moins, des égoïstes qui ne pensent qu’à consolider leur pouvoir. Ici, le langage de la générosité que parlent tous les personnages ne sert qu’à masquer leurs calculs égoïstes.

C'est, paradoxalement, ce monde plein de méchanceté, de lâcheté et d'hypocrisie, qui nous intéresse au plus haut point, car il ressemble un peu au nôtre. Certes, *Othon* ne nous exalte pas, comme *Le Cid* ou *Polyeucte* le font par leur beauté sublime. Mais l'inquiétude que nous cause le monde odieux d'*Othon*, ne l'avons-nous pas éprouvée dans la vie? Ce genre de réalisme constitue l'un des charmes de la pièce.